

# 学校教育におけるがんへの啓発教育プログラム開発 に向けた一考察

橋口 文香\*<sup>1</sup>・是則 由樹\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

\*<sup>2</sup>川南町立通山小学校 宮崎県児湯郡川南町平田6383 (〒889-1302)

(2017年11月1日受付 2017年12月5日受理)

## 要 旨

現在わが国では、生涯のうち国民の2人に1人ががんにかかると推測されている。そこで近年、学校における早い時期からのがん教育が推進されている。しかし、若い世代においてがんそのものや検診受診などにおいて理解している者は少ないと考えられる。そこで本研究では、乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率が低いことに焦点を当て、初等中等教育の課程を経た女子大学生を対象に乳がんおよび子宮頸がんへの認識と検診受診行動についての実態調査を行い、調査対象者に乳がんおよび子宮頸がんについての啓発教育を実施し効果を探ること、初等中等教育におけるがん教育の改善充実を検討することを目的とした。

調査の結果、これまでに乳がんおよび子宮頸がんについての学習経験の有無に関わらず、乳がんおよび子宮頸がんについての知識は低かった。また、乳がん検診を受けたことが「ない」者が9割以上、子宮頸がん検診を受けたことが「ない」者が8割以上で、ほとんどの者が検診を受けた経験がなかった。啓発教育の効果として、乳がんおよび子宮頸がんに関する語彙知識の理解度、自己のがん罹患可能性についても「ありえる」と答えた者の割合が上がった。さらに、乳がんおよび子宮頸がん検診を「受けたい」と思った者の割合も8割を超えたことから、啓発教育を通して正しい知識を得ることで乳がんおよび子宮頸がんへの関心が高まり、啓発教育の効果はあったと推測できた。

## 1. 緒言

現在わが国では、生涯のうち国民の2人に1人ががんにかかる<sup>1)</sup>と推測されている。これは「重要な課題であり、健康に関する国民の基礎的教養として身に付けておくべきもの<sup>2)</sup>」となっている。そこで近年、学校における早い時期からのがん教育が推進されており、生涯を通じて自らの健康に関心を持ち、自己管理能力を育成することを旨とする健康教育の中で実施されている。

また、がん対策基本法(平成18年法律第98号)の下、政府が策定したがん対策推進基本計画(平成24年6月)において、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい知識をもつよ

う教育することを目指し、5年以内に、学校での教育の在り方を含め、健康教育全体の中で「がん」教育をどのようにすべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」<sup>3)</sup> こととされている。

さらに、がん対策として重要なのは早期発見、がん検診受診であるが、様々ながんの中でも特に乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率が低い傾向にある<sup>1)</sup> といわれている。生涯に乳がんを患う日本人女性は現在12人に1人で女性のがん罹患の第1位となっており、また、子宮頸がんは近年、発症率・死亡率ともに若年層で増加傾向にある<sup>1)</sup>。わが国の若年層での乳がん検診受診率は低く、子宮頸がんにおいても、20～30代で発症率が急増しているにも関わらず、検診受診率が低い状態となっている。「国際的に見ても、日本のがん検診受診率は、OECD（経済協力開発機構）加盟国30カ国の中で最低レベル」<sup>4)</sup> であり、まだまだ関心が低く、わが国の検診受診率の向上は今後の課題といえる。また、がんは日本人最大の死亡原因となっているにも関わらず、若い世代において、がんそのものや検診受診など理解している者は少なく、それらの正しい認識を深める教育の実施が求められている。そこで文部科学省が検討しているがん教育においては、「学校教育を通じてがんについて学ぶことにより、健康に対する関心をもち、正しく理解し、適切な態度や行動をとることができるようにすること」<sup>2)</sup> が必要とされている。

本研究では、乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率が低いことに焦点を当て、初等中等教育の課程を経た女子大学生を対象に乳がんおよび子宮頸がんへの認識と検診受診行動についての実態調査を行った。その後、調査対象者に乳がんおよび子宮頸がんについての啓発教育を実施し効果を探ることで、初等中等教育におけるがん教育の改善充実を検討することを目的とした。

## II. 調査方法

### 1. 調査目的

本研究では、乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率が低いことに焦点を当て、初等中等教育の課程を経た女子大学生を対象に乳がんおよび子宮頸がんへの認識と検診受診行動についての実態調査を行い、乳がんおよび子宮頸がんについての啓発教育を実施し効果を探ることで、初等中等教育におけるがん教育の改善充実を検討することを目的とした。

### 2. 調査対象・時期

女子大学生への調査用質問用紙は、佐々木ら<sup>5)</sup>の研究における乳がんおよび子宮頸がんの受診状況についての質問内容と、三浦<sup>6)</sup>の研究における質問内容の一部を参考に、乳がんおよび子宮頸がんについての語彙知識の項目を変更・追加し、また、乳がんおよび子宮頸がんへの学習意欲についての質問を加えオリジナルのものを作成し使用した。

### 1) 事前調査

K女子短期大学1年生76名と2年生68名の合計144名を対象に、自記式質問用紙を使用し、無記名で調査を行った。調査時期は、平成28年4月に実施した。

### 2) 事後調査

啓発教育を実施した直後、啓発教育を受けたK女子短期大学1年生72名と2年生の62名の合計134名を対象に、自記式質問用紙を使用し、無記名で調査を行った。調査時期は、平成28年7月に実施した。

### 3) 啓発教育

事前調査の対象者にがん教育への知識がある保健学の専門教員に授業を依頼し、平成28年7月に30分程度の啓発教育を実施した。

啓発教育の内容は、乳がんおよび子宮頸がんの病態、がん統計、がんの原因、検査方法、治療方法、乳房自己検診の重要性についてである。また、この啓発教育に賛同していただいた日本対がん協会<sup>7)</sup> からリーフレットをいただき授業の資料として使用した。

## 3. 質問内容

(1) 基本的属性、乳がん・子宮頸がんの学習経験について 年齢・これまでに乳がん、子宮頸がんの学習経験があるか・「ある」者はいつ頃か
(2) 乳がんの知識・理解について 乳がんに関する語彙知識(抗がん剤、マンモグラフィ、ホルモン剤、人工乳房、乳房温存手術、乳房再建手術、乳房自己検診)・乳がんの情報源・乳がんに関する認識
(3) 乳がん検診について 乳がん検診を受けたことがあるか・乳がん検診を受けたくない理由・乳房自己検診について
(4) 子宮頸がんの知識・理解について 子宮頸がんに関する語彙知識(子宮体がん、子宮内膜症、ヒトパピロマーウイルス、子宮頸がんワクチン、子宮摘出手術、レーザー治療、不妊治療)
(5) 子宮頸がん検診について 子宮頸がん検診を受けたことがあるか・子宮頸がん検診を受けたくない理由
(6) 乳がん・子宮頸がんについての学習意欲について
(7) 自己のがん罹患可能性について

事後調査においては、「乳がん検診を受けたことがあるか」ではなく、「啓発教育を受けて、乳がん検診を受けたいと思ったか」という設問に変更した。これは子宮頸がんにおいても同様である。

### 4. 倫理的配慮

回答していただいた質問用紙は、本研究以外で使用することはない旨を口頭と文面で伝え、回収した質問用紙の管理を十分に留意し、調査を行った。

## III. 結果

事前調査のアンケートの回収率は、100% (1・2年生144名中144名)、事後調査のアンケートの回収率は、100% (1・2年生134名中134名)であった。アンケートに記入不備があったものを除外した結果、有効回答数(率)は、事前調査のアンケートは144名中138名(95.8%)、事後調査のアンケートは134名中132名(98.5%)であった。

## 1. 基本的属性、乳がん・子宮頸がんの学習経験について

アンケートの対象とした女子大学生の平均年齢は、事前調査が18.85歳で±1.94、事後調査が19.06歳で±1.98であった。

表1. 乳がん・子宮頸がんの学習経験について

乳がん・子宮頸がんの学習経験について (n=138)		回答数 (人)	回答割合 (%)
1. ある		78	56.5
2. ない		60	43.5
「ある」と答えた人はいつごろですか(n=78)(複数回答可)			
1. 小学校		1	1.3
2. 中学校		41	52.6
3. 高校		39	50
4. 短大		7	9
5. その他		0	0

これまで学校において、保健指導や授業等で、乳がん・子宮頸がんについて学んだことが「ある」と回答した者が78名(56.5%)、「ない」と回答した者が60名(43.5%)であった。学んだことが「ある」と回答した者にその時期を問うと、「中学校」が41名(52.6%)で最も多く、次いで「高校」が39名(50.0%)で2番目に多かった(表1)。

## 2. 乳がんへの知識・理解について

表2. 乳がんに関する語彙知識について

語彙	知っている		少し知っている		あまり知らない		全く知らない	
	回答数 (人)	回答割合 (%)	回答数 (人)	回答割合 (%)	回答数 (人)	回答割合 (%)	回答数 (人)	回答割合 (%)
抗がん剤	84	60.9	46	33.3	4	2.9	4	2.9
マンモグラフィー	23	16.7	30	21.7	38	27.5	47	34.1
ホルモン剤	22	15.9	42	30.4	41	29.7	33	23.9
人工乳房	26	18.8	34	24.6	41	29.7	37	26.8
乳房温存手術	14	10.1	16	11.6	41	29.7	67	48.6
乳房再建手術	16	11.6	24	17.4	36	26.1	62	44.9
乳房自己検診	13	9.4	21	15.2	44	31.9	60	43.5

乳がんに関する語彙についてどの程度知っているかを問うと、「知っている」「少し知っている」を合わせて「知っている」、「あまり知らない」「全く知らない」を合わせて「知らない」としてみたときに、「抗がん剤」に関しては「知っている」と答えた者が130名(94.2%)でほとんどの者が知っていたが、その他の語彙に関しては「知らない」と回答したの方が過半数を超えていた(表2)。

## 2-2. 乳がんの情報源について

表3. 乳がんの情報源について

乳がんについての情報源 (n=138) (複数回答可)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. 新聞・雑誌	16	11.6
2. TV・DVD視聴	100	72.5
3. 親族の罹患	10	7.2
4. 知人・隣人の罹患	3	2.2
5. 母の検診受診	13	9.4
6. 母や学校による教育	33	23.9
7. 乳がんは全く知らない	4	2.9

乳がんについての情報は、どこで得ているかという問いに対し、「新聞・雑誌」が16名 (11.6%)、「TV・DVD視聴」が100名 (72.5%)、「親族の罹患」が10名 (7.2%)、「知人・隣人の罹患」が3名 (2.2%)、「母の検診受診」が13名 (9.4%)、「母や学校による教育」が33名 (23.9%)、「乳がんは全く知らない」が4名 (2.9%)であった。乳がんについての情報は、「TV・DVD」で最も多く得られており、次いで「母や学校の教育」から情報を得ていた (表3)。

## 2-3. 乳がんに関する認識について

表4. 乳がんに関する認識について

乳がんに関する認識について (n=138)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. 乳がんという言葉のみ	28	20.3
2. しこり認知まで	89	64.5
3. 手術から術後のケアまで	12	8.7
4. 乳がん発症から回復まで	9	6.5

乳がんに関する認識について、「乳がんという言葉のみ」知っていると答えた者は28名 (20.3%)、「しこり認知」までが89名 (64.5%)、「手術から術後のケアまで」が12名 (8.7%)、「乳がん発症から回復まで」が9名 (6.5%)であり、乳がんについては、しこり認知まで理解している者が多かった (表4)。

## 3. 子宮頸がんへの知識・理解について

子宮頸がんに関する語彙についてどの程度知っているかを問うと、「知っている」「少し知っている」を合わせて「知っている」、「あまり知らない」「全く知らない」を合わせて「知らない」として見たときに、『子宮頸がんワクチン』を「知っている」と答えた者が108名 (78.3%)、『子宮摘出手術』を「知っている」と答えた者が93名 (67.4%)、『不妊治療』を「知っている」と答えた者が125名 (90.6%)であり、この3項目においては「知っている」と答えた者が半数を上回っていた。反対に、『子宮体がん』を「知らない」と答えた者が89名 (64.5%)、『子宮内膜症』を「知らない」と答えた者が77名 (55.8%)、『ヒトパピローマウイルス』

を「知らない」と答えた者が83名(60.1%)、『レーザー治療』を「知らない」と答えた者が82名(59.4%)であり、この4項目については「知らない」と答えた者の方が多かった(表5)。

表5. 子宮頸がんに関する語彙知識について

語彙	知っている		少し知っている		あまり知らない		全く知らない	
	回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)
子宮体がん	20	14.5	29	21.0	52	37.7	37	26.8
子宮内膜炎	20	14.5	41	29.7	38	27.5	39	28.3
ヒトパピローマウイルス	33	23.9	22	15.9	30	21.7	53	38.4
子宮頸がんワクチン	77	55.8	31	22.5	16	11.6	14	10.1
子宮摘出手術	58	42.0	35	25.4	28	20.3	17	12.3
レーザー治療	26	18.8	30	21.7	50	36.2	32	23.2
不妊治療	66	47.8	59	42.8	7	5.1	6	4.3

#### 4. 乳がん検診について

表6. 乳がん検診の受診率について

乳がん検診の受診率について (n=138)	回答数(人)	回答割合(%)
1. ある	6	4.3
2. ない	132	95.7

乳がん検診を受けたことが「ある」者は6名(4.3%)、受けたことが「ない」者が132名(95.7%)であり、ほとんどの者が乳がん検診を受けたことがないということがわかった(表6)。

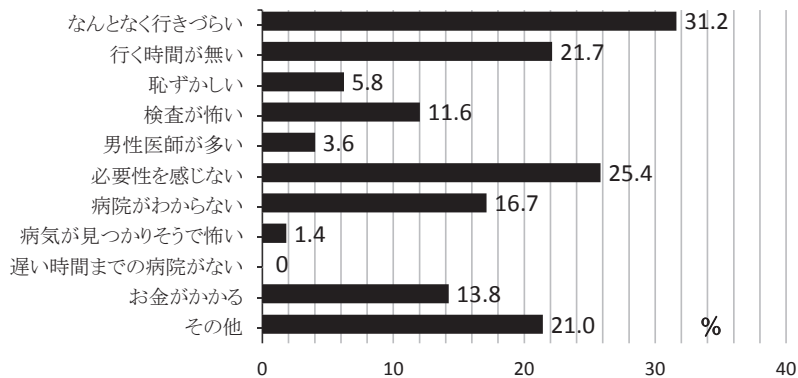


図1. 乳がん検診を受けたくない理由 (n=132) (複数回答可)

4乳がん検診を受けたことが「ない」と答えた者に対し、乳がん検診を受けたくない理由を問うと、「なんとなく行きづらい」が43名(31.2%)で最も多く、次いで「必要性を感じない」が35名(25.4%)、「行く時間が無い」が30名(21.7%)、「その他」が29名(21.0%)、「どこの病院がいいか分からない」が23名(16.7%)という順であった(図1)。

表7. 乳房自己検診について

乳房自己検診について (n=138)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. している	8	5.8
2. していない	130	94.2
乳房自己検診を行わない理由 (n=130) (複数回答可)		
1. 必要性を感じない	17	13.1
2. 面倒くさい	10	7.7
3. やり方を知らない	101	77.7
4. やり方が難しい	4	3.1
5. その他	12	9.2

乳房自己検診を「している」者は8名(5.8%)で、「していない」者は130名(94.2%)であり、ほとんどの者が乳房の自己検診をしていなかった。そこで、乳房の自己検診を「していない」者に乳房の自己検診を行わない理由を問うと、「自己検診のやり方を知らない」と答えた者が101名(77.7%)で最も多く、次いで「必要性を感じない」が17名(13.1%)、「その他」が12名(9.2%)の順であった(表7)。

また、乳房の自己検診を「している」と答えた8名のうち、「毎月している」者は2名、「2～3カ月おき」が3名、「半年おき」が1名、「1年おき」が1名、「その他」が1名であった。

## 5. 子宮頸がん検診について

表8. 子宮頸がん検診の受診率について

子宮頸がん検診の検診受診率 (n=138)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. ある	24	17.4
2. ない	114	82.6

子宮頸がん検診を受けたことが「ある」者が24名(17.4%)、受けたことが「ない」者が114名(82.6%)であり、約8割の者が子宮頸がん検診を受けたことがなかった(表8)。

子宮頸がん検診を受けたことが「ない」と答えた者に対し、子宮頸がん検診を受けたくない理由を問うと、「なんとなく行きづらい」が37名(32.5%)で最も多く、次いで「行く時間が無い」と「必要性を感じない」が27名(23.7%)、「その他」が26名(22.8%)、「お金がかかる」が14名(12.3%)の順であった(図2)。

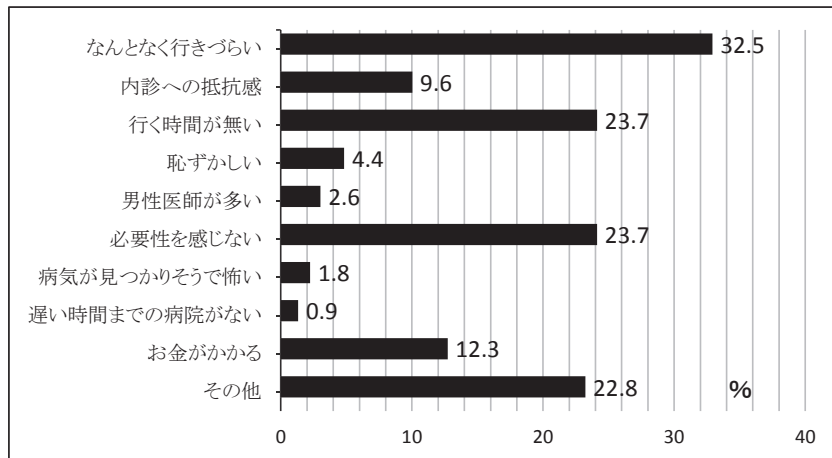


図2. 子宮頸がん検診を受けたくない理由 (n=114) (複数回答可)

## 6. 乳がん・子宮頸がんへの学習意欲について

表9. 乳がん・子宮頸がんへの学習意欲について

乳がん・子宮頸がんへの学習意欲について (n=138)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. 詳しく知りたい	73	52.9
2. 少し知りたい	64	46.4
3. あまり知りたくない	1	0.7
4. 知らなくてよい	0	0

乳がん・子宮頸がんへの学習意欲について問うと、「詳しく知りたい」と答えた者が73名 (52.9%) で最も多く、次いで「少し知りたい」が64名 (46.4%)、「あまり知りたくない」が1名 (0.7%) であり、知りたいと思っている者が99.3%を占めていた (表9)。

## 7. 自己のがん罹患可能性について

表10. 自己のがん罹患可能性について

自己のがん罹患可能性について (n=138)	回答数 (人)	回答割合 (%)
1. ありえる	68	49.3
2. ありえない	4	2.9
3. 分からない	66	47.8

自己のがん罹患可能性について問うと、「ありえる」と答えた者が68名 (49.3%) で最も多く、次いで「分からない」が66名 (47.8%)、「ありえない」が4名 (2.9%) であった (表10)。



## 8. 学習経験からみた知識の違いについて

これまでに学校で乳がんについての啓発教育を受けたことが「ある」者と「ない」者で語彙認識の違いをみたところ、ほとんど差がみられなかった（表11）。

表11. 学習経験からみた乳がんに関する語彙知識

語彙	回答	経験あり（人）n=78		経験なし（人）n=60	
		回答数（人）	回答割合（%）	回答数（人）	回答割合（%）
抗がん剤	知っている	73	93.6	57	95.0
	知らない	5	6.4	3	5.0
マンモグラフィー	知っている	31	39.7	22	36.7
	知らない	47	60.3	38	63.3
ホルモン剤	知っている	41	52.6	23	38.3
	知らない	37	47.4	37	61.7
人工乳房	知っている	35	44.9	25	41.7
	知らない	43	55.1	35	58.3
乳房温存手術	知っている	16	20.5	14	23.3
	知らない	62	79.5	46	76.7
乳房再建手術	知っている	22	28.2	18	30.0
	知らない	56	71.8	42	70.0
乳房自己検診	知っている	21	26.9	13	21.7
	知らない	57	73.1	47	78.3

表12. 学習経験からみた子宮頸がんに関する語彙認識

語彙	回答	経験あり（人）n=78		経験なし（人）n=60	
		回答数（人）	回答割合（%）	回答数（人）	回答割合（%）
子宮体がん	知っている	30	38.5	19	31.7
	知らない	48	61.5	41	68.3
子宮内膜症	知っている	38	48.7	23	38.3
	知らない	40	51.3	37	61.7
ヒトパピローマウイルス	知っている	30	38.5	25	41.7
	知らない	46	59.0	35	58.3
子宮頸がんワクチン	知っている	60	76.9	48	80.0
	知らない	18	23.1	12	20.0
子宮摘出手術	知っている	52	66.7	41	68.3
	知らない	26	33.3	19	31.7
レーザー治療	知っている	37	47.4	19	31.7
	知らない	41	52.6	41	68.3
不妊治療	知っている	76	97.4	49	81.7
	知らない	2	2.6	11	18.3

これまでに学校で子宮頸がんについての啓発教育を受けたことが「ある」者と「ない」者で語彙認識の違いをみたところ、ほとんど差がみられなかった（表12）。

## 9. 啓発教育の効果について

事前調査でみた乳がん・子宮頸がんに関する知識と、啓発教育を実施した後の事後調査でみた乳がん・子宮頸がんに関する知識の結果から、事前と事後で比較し、啓発教育の効果をみた。

事前、事後で知識の変化をみると、『抗がん剤』では啓発教育の前から知っている者が多く、

事前において「知っている」と答えた者が130名(94.2%)、事後においては124名(93.9%)であり事前と事後でほとんど変わらなかった。反対に、それ以外の『マンモグラフィー』、『ホルモン剤』、『人工乳房』、『乳房温存手術』、『乳房再建手術』、『乳房自己検診』の6項目はすべて、事前より事後の方が「知っている」と答えた者が多かった(表13)。

表13. 乳がんに関する知識の変化

語彙	回答	事前n=138		事後n=132	
		回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)
抗がん剤	知っている	130	94.2	124	93.9
	知らない	8	5.8	8	6.1
マンモグラフィー	知っている	53	38.4	86	65.2
	知らない	85	61.6	46	34.8
ホルモン剤	知っている	64	46.4	79	59.8
	知らない	74	53.6	53	40.2
人工乳房	知っている	60	43.5	89	67.4
	知らない	78	56.5	43	32.6
乳房温存手術	知っている	30	21.7	60	45.5
	知らない	108	78.3	72	54.5
乳房再建手術	知っている	40	29.0	53	40.2
	知らない	98	71.0	79	59.8
乳房自己検診	知っている	34	24.6	66	50.0
	知らない	104	75.4	66	50.0

表14. 子宮頸がんに関する知識の変化

語彙	回答	事前n=138		事後n=132	
		回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)
子宮体がん	知っている	49	35.5	74	56.1
	知らない	89	64.5	58	43.9
子宮内膜症	知っている	61	44.2	96	72.7
	知らない	77	55.8	36	27.3
ヒトパピローマウイルス	知っている	55	39.9	109	82.6
	知らない	83	60.1	23	17.4
子宮頸がんワクチン	知っている	108	78.3	115	87.1
	知らない	30	21.7	17	12.9
子宮摘出手術	知っている	93	67.4	99	75.0
	知らない	45	32.6	33	25.0
レーザー治療	知っている	56	40.6	76	57.6
	知らない	82	59.4	56	42.4
不妊治療	知っている	125	90.6	115	87.1
	知らない	13	9.4	17	12.9

事前、事後で知識の変化をみると、『不妊治療』では、啓発教育の前から知っている者が多く、事前において「知っている」と答えた者が125名(90.6%)、事後においては115名(87.1%)であり事前と事後でほとんど変わらなかった。反対に、それ以外の『子宮体がん』、『子宮内膜症』、『ヒトパピローマウイルス』、『子宮頸がんワクチン』、『子宮摘出手術』、『レーザー治療』の6項目はすべて、事前より事後の方が「知っている」と答えた者が多かった。その中

でも、『ヒトパピローマウイルス』については、「知っている」と答えた者の増加が顕著であった(表14)。

表15. 自己のがん罹患可能性への認識の変化

	事前n=138		事後n=132	
	回答数(人)	回答割合(%)	回答数(人)	回答割合(%)
ありえる	68	49.3	91	68.9
ありえない	4	2.9	3	2.3
分からない	66	47.8	38	28.8

事前、事後で自己のがん罹患可能性の変化を見ると、自己のがん罹患可能性は「ありえる」と答えた者が事前では68名(49.3%)、事後では91名(68.9%)であり、事前より事後の方が約20%上回った。また、「ありえない」と答えた者は事前では4名(2.9%)、事後では3名(2.3%)、「分からない」と答えた者は事前では66名(47.8%)、事後では38名(28.8%)でありともに減った(表15)。

表16. 検診受診への意識について

乳がん検診への意識について (n=132)		回答数(人)	回答割合(%)
1. 受けたい		108	81.8
2. 受けたくない		24	18.2
子宮頸がん検診への意識について (n=132)			
1. 受けたい		102	77.3
2. 受けたくない		30	22.7

啓発教育を受け、乳がん検診を「受けたい」と思った者は108名(81.8%)で、「受けたくない」と思った者が24名(18.2%)であった。また、子宮頸がん検診に関しては、「受けたい」が102名(77.3%)で、「受けたくない」が30名(22.7%)であった(表16)。

#### IV. 考察

##### 1. 乳がんおよび子宮頸がんへの知識・関心について

今回調査対象となった女子大学生は、これまでの学校での乳がんおよび子宮頸がんについての学習経験が「ある」者が56.5%で、「ない」者が43.5%であり、大きな差はないが学習経験が「ある」者の方が多かった。そこで、乳がんおよび子宮頸がんそれぞれに関する語彙への理解を調査した後、それらの結果にこれまで学習経験が「ある」者と「ない」者で違いがあるかをみるため集計を行った。その結果、調査した14項目すべての語彙においてほとんど差はみられなかった。学習経験が「ある」者の方がそれぞれの語彙への理解も高く、学習経験が「ない」者は理解が低いと仮説を立てたが、結果は異なった。学習経験が「ある」

と答えた者の中には、まだ自分には関係がないなどといったイメージがあり、これまでの教育課程の中で啓発教育などが十分に実施されていないため、知識が身に付いていないのではないかと考えられる。このことから、早い時期からがん予防の啓発教育の実施や若い頃からの検診受診の重要性を伝えることの必要性が示唆された。

乳がんについての情報源においては、「TV・DVD視聴」から情報を得ている者が72.5%で最も多く、次いで「母や学校による教育」が23.9%であり、身近である映像を通して情報を得ている者が多かった。これは、三浦<sup>6)</sup>の研究結果と同様であった。現在は、がんが取り上げられた番組やDVDも非常に多くあるため、それらを学校での啓発教育に視覚教材として取り入れることで児童生徒の関心も得られやすいのではないかと考えられる。

以上のことから、これまでの学習経験の有無に関わらず、乳がんおよび子宮頸がんについての知識は低いことがわかった。また、がん予防や早い時期からの検診受診の重要性を伝えるため、初等中等教育において啓発教育を実施する上で養護教諭の専門性を生かすことに加え、内容を精査し、対象者に合った啓発教育プログラムの構築が必要であろう。

## 2. 乳がんおよび子宮頸がん検診の受診行動の実態について

乳がん検診を受けたことがない者が9割以上、子宮頸がん検診を受けたことがない者が8割以上であり、今回調査したほとんどの女子大学生が検診を受けたことがないことがわかった。波崎<sup>9)</sup>ら、小林<sup>10)</sup>らの研究結果の子宮頸がん検診受診率に比べ、今回の対象者から得られた検診受診率の方が高かった。また、検診受診行動が盛んなアメリカと比較するとその検診受診率<sup>4)</sup>はアメリカの約4分の1であり大きな差がみられた。アメリカでは10代という若い頃からかかりつけの医者がおり、診察や乳がん・子宮頸がん検診を受ける習慣がある。それに対し、日本の若い頃に診察や乳がん・子宮頸がん検診を受ける習慣はなく、検診受診行動への意識が低いことから、今回の調査対象者を含めた日本人女性の受診率が低い要因といえる。

また、乳がん検診および子宮頸がん検診を受けたくない理由として、ともに最も多かったのは「なんとなく行きづらい」であり、波崎ら<sup>11)</sup>の研究結果と同様であった。「なんとなく行きづらい」と感じる理由として、診察に対する抵抗感や羞恥心、どのような検査をするかわからないなどといった、乳がんおよび子宮頸がんに対する知識不足などから「なんとなく」とマイナスなイメージばかりを持ってしまっているのではないかと推察される。

次いで、検診を受けたくない理由として「必要性を感じない」、「病院に行く時間が無い」を挙げる者も多かった。「必要性を感じない」と捉えている者が多い理由として、「私たちはまだ若いからがんにはかからない」、「まだ私たちには早い」といった根拠のない先入観が大きく関係していると考えられる。「病院に行く時間が無い」においては、対象者が女子大学生であるため、授業後の部活やサークル活動、アルバイトなどが忙しく、なかなか病院に行く時間が確保できないのであろう。しかしながら、乳がんは20代からかかる可能性があ

り、子宮頸がんにおいては20代という若年層での罹患が増えている。これらの現状も踏まえ、乳がんおよび子宮頸がんは若年層でもかかるがんであることを認識させ、まだこれらの検診を受けるのは早い年齢であるといった先入観を失くすことが必要と考えられる。乳がんおよび子宮頸がんに関する知識をわかりやすく説明し適切な検診受診行動に繋がるような早い時期からの啓発教育が重要である。

乳房自己検診においては、実施している者は約6%でほとんどの者が実施していなかった。実施しない理由として、「やり方を知らない」が約8割であった。外来で発見される乳がんは、そのほとんどが自己発見乳がんであり、佐々木らは、「実際の検診の場では、受診者が乳房自己検診を実施していなかったり、実施しても不正確であったために、しこりに気付いていない場合が多い」<sup>12)</sup>と述べている。このため、啓発教育において乳房自己検診の意義や乳房自己検診法を教えるとともに、自己検診を通じて自らの健康に関心を持ち、健康を適切に管理する能力を育成することが重要であるといえる。その点においては、養護教諭が生徒の健康の保持増進をはかるため、日常的に行っている保健指導の中で取り上げることが望ましいと考えられる。

また、乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率はともに低かったが、乳がんおよび子宮頸がんについて「詳しく知りたい」、「少し知りたい」と答えた者が約99%であり、ほとんどの者が学習意欲があるということがわかった。よって、学習意欲の高さから知識・関心を得やすいと考えられるため、啓発教育を実施することは意義があると示唆された。

### 3. 啓発教育の効果について

#### (1) 乳がんおよび子宮頸がんに関する語彙知識の変化

乳がんおよび子宮頸がんに関する語彙知識の変化を事前調査と、14項目のうち「マンモグラフィー」、「乳房自己検診」、「ヒトパピローマウイルス」などの12項目において語彙の理解度が上がった。残り2項目「抗がん剤」、「不妊治療」においては啓発教育の前から理解度が高かったため、事前と事後の調査であまり差がみられなかったと考えられる。このように、正しい知識を得ることで乳がんおよび子宮頸がんへの関心が高まり啓発教育の効果は少なからずあったと言えよう。しかし、全員の者が「知っている」という結果に至らなかったため、今回使用したリーフレットやパワーポイントなどの教材の工夫をしながら繰り返し啓発教育を行うことで、知識の定着を図る必要があると考えられる。さらに、学校教育の「がん」を扱う保健学習においては、小学校5、6学年では学習指導要領の「体育（保健領域）G保健（3）病気の予防について理解できるようにする」<sup>13)</sup>の部分でがん啓発教育の位置づけが可能である。また中学校第3学年においては、学習指導要領の「保健体育（保健分野）（4）健康な生活と疾病の予防について理解を深めることができるようにする」<sup>14)</sup>の部分で、高等学校においては、学習指導要領の「保健体育（保健）（1）現代社会と健康、（2）生涯を通じる健康」<sup>15)</sup>の部分でがん教育を取り入れることができる。初等中等教育においては、

このような学習指導要領での位置づけを含め、がん対策推進基本計画に記されている取り組むべき施策などを盛り込みながら、エビデンスに基づいた指導力が求められるであろう。

### (2) 自己のがん罹患可能性について

自己のがん罹患可能性について事前と事後で調査したところ、啓発教育を終えて、自分のがん罹患可能性は「ありえる」と答えた者が事前より約20%上回り、「ありえない」、「わからない」と答えた者が減った。その理由として啓発教育の中で、現在日本では生涯のうち2人に1人ががんに罹患する<sup>1)</sup>ということや、子宮頸がんにおいては20代という若年層での罹患が増加しているということを伝えたことで、がんは決して遠い存在ではないことを理解したと考えられる。このことは、がん罹患への危機感を少なからず持ったと考えられ検診受診率の向上にも良い結果を与えると推察できた。

### (3) 検診受診への意識の変化

啓発教育実施後の事後調査で、乳がんおよび子宮頸がん検診を受けたいと思ったかという設問に対し、ともに「受けたいと思った」と答えた者が約8割であり、検診受診への関心も高まったといえる。乳がんおよび子宮頸がんは早期発見・早期治療により治りやすく、5年生存率も高くなるといわれているため、若い頃から検診受診に関心を持つことは大事である。また、「受けたくない」と答えた者が約2割であることに関しては、啓発教育の中で、対象者がこれまで知らなかった乳がんおよび子宮頸がん検診の検査方法や内診について知ったことで、その方法に対して逆に抵抗感を覚えてしまったのではないかと推察する。この抵抗感を失くすために、恐怖感や不安感を与えてしまうような啓発教育の内容を避け、内診経験者の話を実際に聞いたり、女医の講話を聴講させたりすることで緩和できるのではないかと考えられる。また初等中等教育においては、恐怖感や不安感を取り除く場面として、日常の相談活動の中で扱うため、その中心となりうる養護教諭には、より確かな知識が求められるであろう。

啓発教育の効果としては、乳がんおよび子宮頸がんに関する知識、関心に良い結果が認められ、啓発教育の効果があったと推測された。がん教育を行うにあたって、「がんについての正しい知識、予防・啓発について「何を」「どのように」授業を進めればよいのかを明確にすることで、ベテラン・若手を問わず、どの教員でも指導できる教材になる<sup>16)</sup>」といわれている。その際推進者となり得るのは養護教諭であり、専門性を生かしたがん教育を展開していく必要がある。がん対策推進基本法を視野に入れ、教育職員全員でがんの啓発教育プログラムを開発することが早急の課題である。

## V. 総括および結論

今回の調査では、乳がんおよび子宮頸がんの検診受診率が低いことに焦点を当て、初等中等教育の課程を経た女子大学生を対象に乳がんおよび子宮頸がんへの認識と検診受診行動に



ついでの実態調査を行い、乳がんおよび子宮頸がんについての啓発教育を実施し効果を探ることで、初等中等教育におけるがん教育の改善充実を検討することを目的とした。

### 1. 乳がんおよび子宮頸がんへの知識・関心について

乳がんおよび子宮頸がんについての学習経験の有無に関わらず、乳がんおよび子宮頸がんについての知識は低かった。このことは、がんはまだ自分たちには早い、関係ないなどといった関心の低さが影響していると考えられた。このような関心の低さは検診受診行動にも大きく関係すると推測されるため、早い時期からのがん予防の啓発教育の実施や検診受診の重要性を伝えることが必要である。そのために、初等中等教育において啓発教育を実施する上で養護教諭の専門性を生かすことに加え、対象者に合った啓発教育プログラムの構築が必要であろう。

### 2. 乳がんおよび子宮頸がん検診の受診行動の実態について

乳がん検診を受けたことがない者が9割以上、子宮頸がん検診を受けたことがない者が8割以上であり、ほとんどの者が検診を受けていなかった。また、乳房自己検診についても実施している者は約6%にとどまり、乳房自己検診の方法を知らない者がほとんどであった。このため、啓発教育において乳がんおよび子宮頸がんに関する正しい知識や検診受診についてわかりやすく説明する必要がある。また、設問の中で、乳がんおよび子宮頸がんについてほとんどの者が学習意欲を持っており、知識・関心を得られやすいと考えられるため、啓発教育を実施することは意義があると考えられた。

### 3. 啓発教育の効果について

事前調査と事後調査で結果を比較すると、啓発教育を実施した後の事後調査の方が乳がんおよび子宮頸がんに関する語彙知識の理解度が上がり、また、自己のがん罹患可能性についても「ありえる」と答えた者の割合が上がった。さらに、乳がんおよび子宮頸がん検診を「受けたい」と思った者の割合も8割を超えたことから、啓発教育を通して正しい知識を得ることで乳がんおよび子宮頸がんへの関心が高まり、啓発教育の効果はあったと推測できた。また、初等中等教育においてがん教育を行うにあたり、がん教育に関する教育課程上の位置づけとして、学習指導要領やがん対策推進基本計画の内容を踏まえながら健康教育を推進することが求められている。その際推進者となり得るのは養護教諭であり、専門性を生かしたがん教育を展開し、教職員誰もが実施できるがんの啓発教育プログラムを開発することが早急の課題である。

今回の調査は、啓発教育を行った直後に事後調査を実施したため、啓発教育を通して検診を「受けたい」と思った者の割合が高いということはわかったが、その後実際に検診を受けたかという検診受診率の変化まで調査するには至らなかった。今後は、質問紙の内容を精選し、啓発教育を繰り返し行うことでがんへの正しい知識と関心を向上させ、検診受診率が向上したかどうかまで調査する必要がある。

## VI. 謝辞

本研究を進めるに当たり、ご多忙中にも関わらず調査に協力いただいたK女子短期大学学生各位、啓発教育をして下さった講師の方に心より感謝する。

## VII. 参考・引用文献

- 1) 国立がん研究センターがん対策情報センター：がん情報サービス。  
Available at:<http://ganjoho.jp/public/index.html> Accessed Nov 2,2015
- 2) 文部科学省「がん教育」の在り方に関する検討会：平成27年3月 学校におけるがん教育の在り方について（報告）。  
Available at:[http://www.mext.go.jp/amenu/kenko/hoken/icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993\\_11.pdf](http://www.mext.go.jp/amenu/kenko/hoken/icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_11.pdf) Accessed May 12,2016
- 3) 厚生労働省：平成24年6月 がん対策推進基本計画。  
Available at:[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan\\_keikaku02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf)  
Accessed May 12,2016
- 4) 厚生労働省：がん対策推進企業アクション 低い日本の検診受診率。  
Available at:[http://www.gankenshin50.mhlw.go.jp/campaign\\_26/outline/low.html](http://www.gankenshin50.mhlw.go.jp/campaign_26/outline/low.html)  
Accessed Jan 19,2016
- 5) 佐々木綾子, 波崎由美子, 山田須美恵, 田邊美智子：更年期女性における乳がん・子宮頸がん検診受診行動の影響要因と受診率向上をめざした健康教育プログラムの効果に関する研究.福井大学医学部研究雑誌 第7巻 第1号・第2号合併号, 20, 2006
- 6) 三浦鏡子：女子大生のプレスト・キャンサー認識. 富山大学人間発達科学部紀要 5 (2) :17-21, 2011
- 7) 日本対がん協会：リーフレット 乳がんのセルフチェック2015年版. 2015
- 8) 前掲6), 17-18
- 9) 波崎由美子, 瀬戸知恵, 山田須美恵, 佐々木綾子：女子大学生に対する乳がんおよび子宮がん啓発教育プログラムの開発.福井大学 重点研究, 平成22年
- 10) 小林洋子, 湯浅洋子, 新堀多賀子, 伊藤由加里, 明渡陽子：女子大生の子宮頸がん・乳がんに関する意識調査.大妻女子大学 人間生活文化研究 Int J Hum Cult Stud. No.24, 121, 2014
- 11) 波崎由美子, 山田須美恵, 瀬戸知恵, 佐々木綾子, 田邊美智子：中高年女性における乳がん・子宮頸がん検診受診行動および健康推進行動の実態と健康教育プログラムの効果に関する研究.福井大学医学部研究雑誌 第8巻 第1号・第2号併合, 35-36, 2007
- 12) 前掲5), 25
- 13) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 総則編, 100, 東京書籍株式会社, 2008



- 
- 14) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編. 156, 東山書房, 2008
  - 15) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編. 112-119, 東山書房, 2009
  - 16) 細島貴信：公衆衛生 第80巻 第2号 子どもへのがん教育.123,2016

## Consideration for the education educational program development to the cancer in education

Fumika HASHIGUCHI\*<sup>1</sup>, Yuki KORENORI\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior College  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

\*<sup>2</sup>Kawaminami City Tooriyama Junior School  
6383, Hirata, Kawaminami City, Koyu-gun, Miyazaki-ken, 889-1302, Japan

### Abstract

In our country, it is surmised now that one per two people suffer from cancer among the whole life. Then, the cancer education from the early time in a school is promoted in recent years. So, this research focuses on the medical checkup consultation rate of a breast cancer and cervix-of-uterus cancer being low, It is performing the survey about the recognition to a breast cancer and cervix-of-uterus cancer, and medical checkup consultation action for the women's college student who passed through the course of elementary secondary education, carrying out the education education about a breast cancer and cervix-of-uterus cancer to an investigation candidate, and exploring an effect, I aimed at obtaining the data about the cancer education in school education.

As an effect of education education, the degree of comprehension of the lexical knowledge about a breast cancer and cervix-of-uterus cancer and the percentage of those who answered "May be" also about the cancer disease possibility of self went up. Furthermore, since the percentage of those who regarded a breast cancer and a cervix-of-uterus examination for cancer as "I would like to win popularity" also exceeded 80 percent, concern about a breast cancer and cervix-of-uterus cancer increased by acquiring the right knowledge through education education, and I have surmised that there was an effect of education education.

Key word : school, cancer, education educational program, survey medical checkup consultation